



vol. 4

取材文／広里隆樹
撮影／高橋和子

心は遠くに、詩は足元に



長田 弘 Hiroshi Osada 詩人

おさだひろし●1939年福島生まれ。63年早稲田大学第一文学部卒業。65年詩集『われら新鮮な旅人』でデビュー。71～72年米アイオワ大学国際創作プログラム客員詩人。詩集に『深呼吸の必要』(84年)『食卓一期一会』(87年)『世界は一冊の本』(94年)『記憶のつくり方』(98年、森原武夫学芸賞受賞)『長田弘詩集』(03年)『辛いなるかな本を読む人』(08年、詩歌文学館賞受賞)『世界はうつくしい』(09年)などがある。エッセイとしても知られ、『私の二十世紀書店』で毎日出版文学賞(84年)を、また、絵本『森の絵本』で講談社出版文化賞(00年)を受賞。対談集に『問う 始まり』のコミュニケーション』(09年)などがある。

あるとき、混雑する電車のなかで、荷物を抱えたまま吊革につかまっていた。すると、目の前の席の少女がいきなり私の肘をつかんで引っ張るのです。怪訝に思ったら、どうやら「席を譲ります」ということのようなのです。ひとこと「どうぞ」と言葉をかけてくれればいいのに。見知らぬ年上の人にそう声をかけていいか、たぶん困ってそうしたのだと気づきました。席を譲るのに、「すみません」と声をかけるわけにもいきません。

また、あるとき、駅で、約束した相手が来ないらしく、ひどく苛々している青年がいた。そこに、約束に相当遅れてやってきた少女がむしろゆっくりと近づいてきて、会うなりに、青年の腕をとって、広げた指で尺をとるようにして、一つひとつ音節を区切って「ゴ・メ・ン・ネ」とおだやかに言い、怒り心頭に発していたはずの青年も、微笑せざるをえなかった。

言葉は意味だけでできているのではなく、その言葉がどんなコンテキストをみちびくかで決まります。肝心なのは、言葉でその場にどんなコンテキストを引っ張り出すか、なのです。

誰でも読み書きできれば、言葉を使うことが当たり前のようにできると思っている。けれども、それは決して当たり前にはできないことなのではありません。

というのも、言葉というのはその言葉を学んで覚えるものであっても、どんな人も事新しく自分だけの言葉というものを創ることはできません。言葉のできることは、自分の知っている言葉をどん

なふうにするか。言葉をどう組み合わせ、どういうコンテキストをつくって、どう使っていくか。言葉は言葉の使い方が全部なのです。きらびやかな言葉や難解な言葉が言葉のゆたかさを生むものではありません。小さな子どもは、たった3、4語を組み合わせるだけで自分の気持ち、自分の思いを伝えることができる。つまるところ、言葉の使い方です。

最初に言葉がある。しかし、言葉に完成というものはありません。最初にできあがっているが、最後の最後に至ってもできあがっていない。それが言葉というものの特性です。

人は自分の人生を通して、ただひたすら言葉の組み合わせに努めるほかありません。持てる言葉をシャッフルして、組み合わせ、自分の物の見方、感じ方、表し方をつくっていかないと、言葉のよき使い手になれないままになってしまふ。言葉は正直です。言葉を大切にしないと、人はかならず言葉に足をすくわれます。

人が職業で成功するかどうか、実は言葉にかかっています。将来どの職業につこうとも、言葉づかい次第です。言葉、磨かざれば光なし。優れた職業人というのはみな、言葉のよき使い手です。

そのように考えてくれば、言葉の大切さというものが、あらためてわかります。では、どのようにすれば言葉の組み合わせを豊かなものにすることができるのか。

私は詩を書くときたいはいは一人で

す。けれども、けっして孤独ではない。もう一人の自分に話しかけながら、もうひとりの自分と共に、言葉に向き合ってきました。古来、詩というものは口に出して読まれるものでした。それは他人に伝える以前に、もうひとりの自分に語りかける言葉でした。

優れた詩には、息つぎ、プレスによって区切られた美しいリズムがあります。もし好きな詩歌があればよし。その詩を声に出して読みながら、自分に聞かせることで、人は母語のリズムや息継ぎを覚え、言葉の組み合わせの妙をきくと体得するようになります。

自然の風景にひとり向かって、言葉を発してみるのもいい。山や川は心を遠くに放つ場所だからこそ、人はそこで自分と向き合うことができます。花の色に興味を持つだけで、実にいろいろなものが見えてきます。そうして、言葉の豊かさに、あらためてありがたさを感じるができるはずです。

若い人たちの前に今たくさん言葉が無造作にころがっています。誰もがそれを使うことができる。だからこそ、その組み合わせに鈍感なままなのは、実にもったいないこと。世界は言葉で溢れています。一番大切なものは当たり前のように目の前にあるから、大切なものと思わない、それに気付くには心を遠くに放つことです。「心は遠くに、詩は足元に」とロシアの詩人がかつて言いました。人の足元を確かにするのが言葉です。